

明治の別子

平成25年9月7日(土)10:00~11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

1. はじめに

新居浜市民で別子銅山について書き綴った人物といえば、伊藤玉男である。西条市加茂川来須の生まれだから同郷の人になる。昭和38年から銅山峰ヒュッテの主人のかたわら、現場で別子銅山の研究と遺跡の保存に努めた岳人である。出会った頃の作であり、伊藤が歴史に切り込もうとした問題意識がよくわかる「明治の別子」を読む。

2. 伊藤玉男の著作歴

四国の山旅ー赤石山系	昭和34年	4月10日	刊行	
旧別子銅山案内	昭和44年	4月1日	刊行	共著
赤石山系の自然	昭和46年	6月10日	刊行	
明治の別子	昭和48年	10月1日	刊行	
あかいしーある遭難を機に	昭和53年	6月	刊行	
別子開坑の頃	昭和55年			益友
あかがねの峰	昭和58年	12月8日	刊行	
天満道と泉屋道	平成元年			益友
あかがね物語	平成2年			益友
山守り30年	平成5年	4月18日	刊行	
山のはなし	平成6年	11月27日	刊行	
泉屋道と立川銅山路筋	平成7年	10月		山村文化
地名あれこれ	平成8年	1月		山村文化
別子山の木地屋	平成8年	4月		山村文化
笹ヶ峰修験と清滝信仰	平成8年	7月		山村文化
愛媛の山旅ー赤石の四季	平成8年	7月1日	刊行	
銅の道	平成8年	10月		山村文化
炭の道	平成9年	1月		山村文化
別子銅山の煉瓦	平成9年	10月		山村文化
鉄人の墓碑	平成9年	10月		山村文化
銅山峰の落葉松	平成10年	5月		山村文化
再生の自然	平成10年	8月		山村文化
写真は語る	平成11年	5月		山村文化
別子鉦山端出場を探る	平成11年	8月		山村文化

カラマツの故郷紀行	平成12年 5月	山村文化
箱膳	平成12年 8月	山村文化
お稲荷さんを訪ねて	平成12年11月	山村文化
別子本舗	平成13年 5月	山村文化
ノリイモとタズ	平成13年10月	山村文化
別子銅山の歴史と自然	平成14年 1月	山村文化
山に抱かれて	平成14年 1月20日 刊行	
頼み寺	平成14年11月	山村文化
源兵衛舗	平成16年 6月	山村文化
あかがねの故郷	平成16年 9月15日 刊行	共同編集

3. 本の構成

序	愛媛大学教授 星島一夫
はじめに	伊藤玉男
目次	
本文	8章の構成
付録	
あとがき	

	目次	次		
第一章	松葉家にて	P. 7～	裏門部落 (炭方)	P.101～
第二章	鉦山の別子山村	P. 17～	東延部落	P.102～
第三章	飯場制度と鉦夫交際	P. 27～	高橋部落 (ヨココー)	P.104～
	飯場制度	P. 29～	小足谷部落	P.108～
	鉦夫交際	P. 43～	第七章 祭礼	P.115～
	友子	P. 56～	山神祭	P.118～
第四章	鉦夫頭	P. 63～	大鉦祭	P.126～
第五章	足谷山	P. 77～	不動祭礼	P.134～
第六章	集落	P. 85～	お地藏さん祭り	P.135～
	別子本舗	P. 86～	第八章 生活と地域社会	P.139～
	山方部落	P. 89～	付 録	P.155～
	木方部落	P. 91～	別子銅山明治の産銅量	P.156～
	風呂屋谷部落	P. 93～	別子銅山明治の年表	P.158～
	永久橋部落	P. 95～	参考資料	P.163～
	目出度町	P. 96～	あとがき	P.165～
	吹方部落(見花・両見谷)	P. 99～		

4. 記載の概略

第一章 松葉家にて

明治24年(1891)、歎喜坑上の山方集落に生まれた松葉藤之助を平形町に訪ねる。松葉は、東京工手学校を大正元に卒業、直ちに別子銅山に雇用される。発足後間もない自彊舎に入り鷲尾勘解治の薫陶を受ける。年別子銅山、とりわけ旧別子にまつわる話が積然としないのを正す思いからであった。明治、大正、昭和と別子銅山と共に生きた松葉夫妻から明治の銅山を模索する手がかりを得たいと考えた。

松葉藤之助：大正元年、住友鉱業(株)に入社。発足まもない自彊舎に入舎して鷲尾勘解の薫陶を受ける。

東京工手学校：明治政府の富国強兵政策のもと産業の近代化が進められ高等学校や大学などの近代産業を育成するための指導者を育てる高等教育機関は着々と整備されていたが、近代化を達成するために必要な職員の不足が深刻だった。これを受けて、明治20年(1887)に現場を支える職人を育成することを目的に、帝国大学(後東京帝国大学、現東京大学)初代総長であった渡辺洪基らを中心とする有志によって設立された職人学校で日本で最も古い私立の工業実業学校である。現在の工学院大学の前身。

第二章 鉱山的別子山村

別子銅山は280年もの長い間、一経営者で稼業されたので、一種独特な社会が形成された。明治時代の別子山村の村長は、別子銅山の幹部が就任するのが慣行になっていた。

元禄4年(1691)、大阪の産銅業者の泉屋によって、西條藩の立川銅山の南に隣接する天領で別子銅山が開発された。別子銅山の鉱床は「別子型鉱床」と固有名詞で呼ばれるように大規模なもので、同じ経営者でもって長く続いたので地域行政までも膝下においてしまった。そうなった背景に注目する。開坑も幕府の後押しがあったのではないだろうか。遠町深舗の対応、立川銅山との境界争い、運搬路の短縮などの要望などは、結果的には泉屋のいうとおりになっていた。ともかく異例ともいえる幕府の庇護のもとに発展していった。

銅山峰北斜面にある墓地の墓石に前山庄屋のものがある。別子山本村庄屋とは別に、別子山村大字銅山字前山にも庄屋があった。一村に二庄屋。山例五十三ヶ条に端を發した徳川幕府の鉱業政策は維新と共に崩壊した。しかし、別子山村は住友との旧来の陋習ろうじゆから脱皮できず百余年となる。別子銅山閉山の昭和48年(1973)が別子山村の新生立村になるであろう。

山例五十三条：住友建設(株)の取締役社長、取締役会長を歴任した齋藤武幸の著作「明

治から平成へ～住友と共に六十年～」の中に「徳川幕府は、主力輸出産業である銅山の開発を最優先した。江戸時代、一般の人は国内の旅行をきびしく制限されていたが、鉱山技術者である鉱夫は諸国への出入りが自由だった。これは徳川家康が制定した『山例五十三条』にもとづくもので、幕府の直営はもちろん各藩の鉱山開発を促進させるためである。また鉱夫は、士農工商の身分の士農の間に位置し大切にされ、誇りをもって鉱山開発に従事した。」とある。

その内容を抜粋する。名城の下であろうと金鉱があれば採鉱しても構わない。山師金掘師を野武士と呼ぶこと。山師金掘師は関所を通る際、見石(鉱石の言い当て)に合格すればこれを許可する。関所の役人はその能力真贋を確かめるため、あらゆる鉱石を見せて言い当てることができるかを確かめること。金鉱を見つけたならば領主国主への届け出は勿論、村役人にも届けること。山師金掘師は金鉱探しなどで山に入るならば、山の中ではあらゆる事をしようと許す。届け出も無しに勝手に採掘をしないこと。日本全国どの鉱山で働こうと、粗末な扱いを受けたならば奉行所に訴えること。山師金掘師が殺人を犯して山に逃れたならば、子細を改め、そのまま働かせること。ただし、主殺しと親殺しを犯したならばその罪は言い逃れを許さず、縄をかけること。山師金掘師の序列は金山師、銀山師、鉛山師、銅山師とする。諸人が金銀を宝とすることができるのも、山師らの御陰である。その功績は重大である。素人が金鉱を見つけたとしても、山師しか採掘は許さない。

石見銀山世界遺産センター刊行の「石見銀山遺産ノート」に収録されている「石見銀山の鉱山社会と法規制について」で松岡美由紀は、「鉱山法として最も知られているのは徳川家康が天正元年(1573)に発布したとされる『山例五十三ヶ条』であろう。これが偽書であることは森嘉兵衛「近世鉱山法の研究」などこれまでの研究で私的にされている通りで、後世に山師などの側から身分的保証の根拠とするために作られたものと言われている。しかしながら、鉱山でのみ摘要される法的秩序は各地の鉱山で存在した。

正しくは、東照権現御遺書鉱山書五十三ヶ条宝巻。鉱夫の地位を高くするために作られた偽書。」

[明治維新の鉱山政策: 明治5年(1872)の鉱山心得、明治6年(1873)の日本坑法による鉱業専有主義、本国人主義等である。]

第三章 飯場制度と鉱夫交際

従来、鉱夫とは鉱山労働者の総称であり、鉱夫とは坑内で採鉱、探鉱に従事する職種であるとする考えも改めなければならない。鉱夫とは最も危険な採鉱、探鉱の仕事を受

け持つ最高の職種である。鉱夫の手伝いをする者は手子、鉱石を運搬する者は負夫、坑外で雑事にあたる者は日用である。

飯場制度

飯場制度がいつ頃からあったかは定かでないが、ある種の寄宿制度が淘汰され、形態化されて飯場制度へと移行していったのであろう。開坑後、産銅量が飛躍的に増えるにつれて稼人の数も急増していった。伝手を頼って入山した近郷近在の者が寄り集まって同宿する寄宿屋が生まれた。この寄合世帯(寄宿屋)は飯場とは別に明治時代まで続いた節がある。明治20年代の別子銅山復元図を作ったところ、戸数の少なさに驚いた。3交代制だったので6畳一間で10人は生活できた。これが飯場へと発展していったとは考えない。

飯場には3つの種類があった。鉱夫飯場、手子飯場、日用飯場(総小屋)である。

鉱夫飯場の制度を考察する。江戸時代の鉱山稼業は一般には3～5年の年季稼業であった。従って、稼人たちは渡り者となって全国を転々としていた。これらの渡り者を受け入れる専門の宿舎が必要になったのは当然である。彼らは立派な鉱山技術者だったからである。

当時の採掘は全て完全な請負制であった。明治初期になって消滅した山留の名称が出てくる。現場監督者の山留が年を取り、けがで働けなくなったら、多くが全国の鉱山を渡り歩いた者なので、この地に安住を決めて渡り者専属の寄宿屋である鉱夫飯場が発生したと考える。飯場と稼人の年季に期限がなかった別子では、特有の制度が生まれたと想像する。

飯場制度の台頭は、社会情勢の変動や住友の経営方針の刷新を考えるとなるべくしてなった感が強い。明治維新と西洋から輸入された近代化の中で鉱夫らは生活を守り、権威維持として団結することを考えた。従来の友子を強化し、その交際の場を飯場とした。鉱夫飯場には将来鉱夫に出世しようとする鉱夫手子がいた。鉱夫手子が修業した跡である孔や切り取り跡が今も山中に残っている。優秀な鉱夫を多く抱えた飯場は何かと優位となるので、鉱夫の養成に専念した。明治39年(1906)の改革前には17の飯場があった。飯場の構成員は100人から200人であった。明治中期に確立した飯場制度も明治末期に牧相信の改革で凋落する。

全国の鉱山でピン勿ねはあったが、別子の飯場制度は足尾ほど乱脈ではなかった。少数の不良飯場頭や請負人を追放したのは頷けるが、多くの善良な鉱夫らのささやかな要求を退けたり、中心人物を解雇したのは牧の権力欲からであったと言えよう。飯場制度への挑戦ともなる。

ルイ・ラロック進言の東延斜坑、小足谷疎水坑、第一通洞、第三通洞等は、外者の力を借りず、低賃金にあまんじた別子の鉱夫、手子でやり遂げた。高給取りの上に安楽をむさぼった庸人や等外社員のなせる業ではなかった。

機械化と稼人の努力で生産を飛躍させた。実績が評価となる職員には太平の夢を与え

た。採掘の請負に飯場頭が介入して飯場単位の請負に推移する。等外社員の仕事の割り付けも飯場頭が介入させられていった。飯場頭詰所に詰めさせ、多忙となると飯場頭代人を置いて補佐させるようになる。

従来、賃金は10名内外の代表の請頭に支払われていたが、飯場頭は飯場員からの世話料で生計していた。飯場頭の請負介入で賃金は飯場頭に支払われようになり、ピン勿ねが出現する。

明治末期に鷲尾勘解治が自彊舎を開き、下級社員の精神を鼓舞したのは、墮落しかけた指導体制に活を入れんとした証拠である。

[明治45年は7月30日まで、7月31日からは大正元年になる。自彊舎の開設は8月だから、自彊舎の開設は大正となる。]

鉦夫交際

鉦夫交際は飯場制度の成立よりもかなり古くから確立されていた。鉦夫交際の名称は明治中期の前半からであろう。以前は友子組合、友子同盟の名称であった。その発生は、江戸初期から中期頃説と江戸末期説の二説がある。

鉦夫出世を辿る。鉦夫になりたい者は鉦夫飯場に入る。その意志のない者は手子飯場か、知人を頼って寄宿者になる。鉦夫飯場に入った者は、手伝い、手子、鉦夫修業を経て、取立式で満場一致で認められて鉦夫に昇進する。

大正から昭和初期に一堂に集めての取立式を考えたのは鷲尾勘解治で、形態は同じだが、その本質はかなり歪められている。語り伝えられているのは、これの変形である。

取立式には、浪人、客人、隣国飯場、鍛冶屋、中老、世話人が立会し、親分、兄分、子分が整列した。取立式は一切の参観は許されなかった。取立状には、由来、目的、取立の宣誓、取立鉦夫名簿、立会人名簿等が記され、読み上げられる。親分、兄分、子分の挨拶、立会人の祝詞がなされる。取立式は5～6時間もかかった。その間出世候補は三方に載せた切鎚と鑿を両手で目よりも高く差し上げていると聞く。盃を頂戴するまでその姿勢を崩してはならなかった。酒宴を開く。出世後の働きを見て一人前と鉦夫と親分が判断した時に、山内の立会人の署名・捺印をもらって、ようやく本人に渡される。

「別子において坑夫取立をするようになったのは明治二十四、五年頃。飯場が設立されてからである。さて取立を志願する坑夫がある場合は、先ずその坑夫の所属せる飯場から選ばれた世話人が職親(親分)及び兄分を記載せる目録(下免状)を作り、各飯場及び近隣の鉦山を廻って立会を依頼する。立会の依頼を受けた各飯場及び鉦山は立会人を定めて予めその出席を通知する。かくして世話人が中心となり、立会及び職親、兄分を招いて取立式を行うのである。式に要する費用は全て取立鉦夫の負担とし親分兄分及び飯場の同僚は、一定の祝儀を出す例になっていた。

式の順序は、先ず世話人が挨拶を述べて後、親分と子分に盃を配る。そこで親分子分の盃が交わされるのであるが、この場合、子分は各自、ハンマーとすかしを載せた三方を戴く習慣になっている。そして親分子分の盃が済めば一同席を退き、跡に兄分が着席して同様兄分弟分の盃をなし、そのあとは一同揃って酒宴に移るのである。右の取立式が終わると世話人は免状(取立証)へ各飯場、鉾山よりの立会人の印を取り、更に「免許開」の酒宴を開く。免状は一応親分に渡し、親分は子分を教育した後に本人に渡すのを通例とした。また取立式に立会した坑夫は伯父分となり、新取立坑夫は事後伯父分の者と呼ぶ場合必ず「何々をじき」と呼び、決して本名を呼ぶことをしなかった。](昭和15年8月15日発行「親善」第1巻第3号・別子銅山開坑二百五十年記念特輯号から)

[切鋸・鑿は仕事道具として親分より新品を戴くのである。式の間4kgのものを目より上に保持するのは松葉さんからの間違った伝聞ではないか。式の中での切鋸・鑿を持ち、置く説明がない。宮大工では弟子が独立するとき、親方から新品の道具一揃が贈られる。親方よりいい道具を持っているからできないことはないとの自信をもたせるために、親方よりもいいものを持たせる。(薬師寺宮大工棟梁・西岡常一 著「木に学べ」から)]

[取立状には立会人名が署名されているのであるから、後からの署名はない。「親善」の記述から考えると、取立式で署名・捺印している。後日の捺印なら立会人死亡後の場合は書類不備となる。]

友子

友子の活動は、①一鉾山を中心としての救済措置 ②関係鉾山と結合した広域救済措置 ③秘伝ともいふべき採掘技術の伝授。その結果、職業上の親子関係が生まれ、肉親同様の深い交友・救済へと発展した。

友子組合は、見習修業期間を経て親分・子分の盟約を持ち、出世状が与えられて友子組合員になる。友子組合で最も重要なのは箱元交際である。寄付帳、奉願帳を所持する者に対する救済である。寄付帳は一鉾山で救済困難な大病人・不具廢疾で全治の見込みのない者に交付される。奉願帳は災害による傷害・不具廢疾のため労役不能の者に交付される。交際に加わる全国鉾山はこれに扶助救済を加える。費用は各友子の負担である。

友は仲間、子はもとから分かれて生じた者である。江戸時代初期・中期に一鉾山の救済団体が友子で、江戸時代後期に全国的につながる組織が友子組合・同盟である。必要にかられて自然発生し淘汰されて形態が整えられたと思考する。

「古来、坑夫の間には鉾夫精神の発揚と鉾夫道の錬磨を標榜し、全国的に渡り鉾夫の組合があった。当時の鉾夫に対して現在のような保護規定などはなく、従って災害の為に死亡したり、もしくは不具廢疾となった場合にも何ら遺族に対する生活の保障がない状態であったので、この

組合は一面彼らの相互扶助は凡て飯場に所属していたが、もし坑夫の中に死亡者がある場合は、飯場に所属せる渡り坑夫は、各自に米一升と金五銭を抛出して扶助する習慣であった。又坑夫が疾病もしくは不具廢疾となった場合も亦一定の救済を行った。又他の鉱山を失職せる渡り坑夫が来山した時は、飯場では浪人として待遇し衣食を供し、適當の職がない場合は餞別金を与えて他鉱山へ紹介した。又負傷疾病等に因って従来の労働に堪へざるに至った時は、所属飯場において「奉願帖」というものを作ってその坑夫に与へた。奉願帖を作る場合は、全員集会を開き、選挙を以て世話人を定め、世話人を各飯場及び近隣の鉱山を廻って立会を依頼する。又他鉱山より来ている浪人滞在している時は、その浪人は全国の鉱山代表する資格で立会することになっていた。そこで坑夫はこの奉願帖を頼りとして諸国の鉱山を巡り生活の資を得ると共に義援金を集め、他の職業に転ずる資金としたのである。](昭和15年8月15日発行「親善」第1巻第3号・別子銅山開坑二百五十年記念特輯号から)

「友子の呼称に定説はない。友子の一団に属する者は、この団体で親が子の世話をすると同じだからと推察するとの説がある。

友子とは、大阪の陣の際、真田幸村に追尾された徳川家康が単騎のがれて、日影澤鉱にかくまわれて救助された伝説に由来している。家康はこの恩に報いて坑夫を野武士の格とし、格式を認めた。家康にまつわる伝承は別として友子制度は徳川時代に形成さ、北海道では太平洋戦争中まで存続した、鉱夫クラブ・ギルド的な同職組合だった。(昭和15年の「親善」に記述があるので、別子でも太平洋戦争中まで存続。)

友子の名称には、友子、友子同盟、友子同盟、同盟友子、友子組合、同盟友子、交際飯場、同盟鉱夫、同盟などがある。徳川期から明治前期には友子。明治後期に入ると友子制度は、鉱山の発達を反映して非常に発達して、友子間の連絡も一定の地域内で激しくなってくる。同盟の名称が出てくる。一人前の鉱夫として免状を取得しないと加盟できなかった。

各鉱山の友子は、交際の事務所として友子交際所(箱元)を特定の飯場に設置し、選ばれた役員が交代で詰め、友子交際に必要な会費徴収、運営、共済規定の執行等をする。渡り鉱夫はいろいろな支援を求めてまずは友子交際所を訪問する。

友子交際には、山中交際と箱元交際がある。山中交際では、一鉱山内か一飯場内の共済で、病気見舞い、死亡弔慰金給付等をする。箱元交際では、奉願帳や寄付帳の交付を受けて、全国の箱元を遍歴し寄付を求めてきた労働能力喪失等の友子に各飯場の内規に従って寄付金を渡したり、時には併せて個人有志の支援金も集めるように世話をする。

明治38年(1905)3月9日から5月9日まで、筑豊炭鉱の和田梅吉が別子銅山8飯場に来て寄付金21円70銭を集めた記録が残っている。それは全寄付金の約8%に当たる。」

(田川市石炭・歴史博物館長 安蘇龍生 「筑豊の炭鉱と友子の存在検証」から)

[友子、友子組合を世界百科大事典、日本歴史大辞典、愛媛大学の星島教授の説明を列挙して別子での模様を類推しているのに留まる。伊藤玉男が「昭和15年8月15日発行『親善』第

1巻第3号・別子銅山開坑二百五十年記念特輯号」を図書館で見ていると詳しく記載したはずである。郷土資料として閉架図書になっていたのを見ている。図書館での図書の検索は書名等によるので、調べたい図書情報を持っていないと、閉架図書の閲覧は困難である。

友子制度史について詳しい村串仁三郎も「日本の伝統的労使関係」の中で、別子銅山での友子の存在についてあいまいにしているが、昭和15年の「親善」で具体的に分かった。]

第四章 鉦夫頭

鉦夫頭は、職制であって職種ではない。大鉦の歌詞にある「山留」が後の鉦夫頭である。鉦夫頭に任命されたら鉦夫交際から脱退する。

8番坑道の職場とは、8番坑道から7番坑道までの鉦画である。この鉦画内には10～20の堀場があり、一つの堀場には3～4名構成で2交代か3交代で稼働している。1坑道には100～200名の作業員がいる。この坑道の採鉦責任者が担当鉦夫頭である。「担当」と呼ばれる。今日の「主任」である。

坑道の指導組織は、担当鉦夫頭1名、鉦夫頭1名、頭手子1名、差配2名で編成されている。頭手子と差配は役付きと呼ばれていた。鉦夫頭は堀場の責任者、頭手子は運搬・雑事の責任者、差配は鉦夫頭や頭手子の補助員で、坑内の役局か見張所で指揮を執っている。担当鉦夫頭は採鉦課の事務所に机がある。

鉦夫頭になるには、①技量が優れている ②鉦夫間の交際で人望がある ③山内の評判がいい の選考基準に適合した者を鉦夫頭会議で承認する。そして、担当鉦夫頭が会社側に推挙して始めて三等鉦夫頭の辞令が下りる。選考基準の3項目とは別に、山に定着した稼人の子息も代々の功労として考慮された。

鉦夫頭の名称は、明治9年(1876)2月制定の住友家法諸規則の中に、予州別家規則が組み込まれ、賃金の細目に出現する。それ以前は何と言ったか。明治5年(1872)4月制定の別子銅山改革法申渡に、鋪方、掘子、前髪・子供、山留という言葉が散見する。江戸時代の諸文書に出てくる名称と同じである。

鉦夫頭(山留)はどんな仕事をしたのか。明和6年(1769)に作られた御銅山師下代人数併役付覚に別子銅山の奉公人のことが記されている。間符役所詰(鋪方役所)は、頭役1名、鉦買1名、水引方1名、得歩引方1名、帳面方3名、鉦砕方1名となっている。頭役は担当鉦夫頭、鉦買は鉦夫頭に相当し、山留である。水引方と得歩引方は頭手子と差配に相当する。帳面方、鉦砕方は採鉦とは直接は関係ない。山留の仕事は、請負制の下で堀場の指定や調整役であった。

山留の地位を見ると、鉦夫頭は他の職種に比べて優遇されているが、庸人(職員)ではない。等外である。今でいう現地採用者であるから本社社員の奉公人ではない。昔風に言えば山師家内である。担当鉦夫頭は等外ではないが等内でもない。准庸人(職員)・準奉公人というところである。

明治44年(1911)、近代鉦山労働者を養成する目的で小足谷小学校に講習所を併設した。飯場制度の改革に比べて鉦夫頭制度の時間をかけた質的改革である。やがて鷲尾勘解治

が掲げる理想のもとで活躍する。

第五章 足谷山

別子銅山を支えたものに製錬と製炭があるが、その都度説明する。

日浦谷山、足谷山、七番山のように谷の下に「山」をつけた地名は、日浦谷川、足谷川、七番川の周りの山という意である。足谷は当て字で、本当は悪し谷である。足谷は険悪な溪谷である。足谷の平坦地、緩斜面には施設の跡がある。足谷を遡行すると不毛地帯が現われ、やがて分水嶺に達する。足谷峰で今の銅山峰である。足谷峰の一番低い所を嶺北の人は古来、船窪と呼んだ。銅山越の西に聳える山が西山といい、東の高い部分で東延の上方一帯を東山と呼ぶ。銅山越の南が前山で、その東が天満山、更に東が東延である。江戸時代の足谷山が明治から大正にかけて銅山となり、生産の本拠が東平、端出場へと移った跡は旧別子と呼ばれるようになった。

別子開坑当時の足谷山は、うっそうたる密林であったという。榎、樅、五葉松、桧、杉等の巨木の間をヒメジャラ、ネジキ、リョウブ、ツツジ類が埋めていたようである。足谷山は早い時期に、伐採と煙害で不毛の山となったと推測される。

広瀬幸平の発想で植林が始められたのは明治の初期からである。自然への報恩という緑化事業は算盤勘定では成しえなかった。緑が回復した旧別子の林相は落葉松と赤松が主体である。

小足谷、東延谷、金鍋谷について記する。 明治中期の別子銅山の復元図が挿入。

足谷山は、寒冷多雨で気象の上では恵まれているとはいえない。

銅山越と西山の間から北方眼下に太平坑の廃墟が見える。南に目をやり露頭線を追うと、大和間符、西山間符、床屋間符、歓喜間符、歓東間符、長永間符、大切間符、天満間符、東延斜坑、東山間符、東山新口間符と連なる。

[山地名は、川の周りの山ではなく、山域を示す地名で、山々で囲まれた凹地域である。立川山、種子川山、大野山などの例がある。凸地域の地名は島で水面から出た区域を示す。]

[足谷川は、人が入山するには悪い状態の谷川。冠山と平家平の南側の高知県の川に足谷川がある。大橋ダムの北に当たる。上州の赤沢谷悪谷、奥多摩の日野川小川谷悪谷は沢登りコースとしては有名。]

銅山峰の南北にある足谷川は、登山道が整備されていて安易に上れるが、V字谷で人を寄せ付けぬ谷川である。別子開坑の調査報告にも人跡未踏の地を進とある。]

[銅山越を船窪と嶺北の人が呼んだとあるが、西山と東山の吊尾根を船底に見立てたものである。新居浜平野からの眺望からである。銅山峰の分水嶺の南に窪地があるから船窪の峰の説もあるが、船窪との呼称の出どころは遠望したところからである。]

[うっそうとした密林は、別子開坑二百五十年史話の記述を指す。大和間符と大黒間符の抜き合いで境界争いになった時、別子山側は分水嶺ではなく見通し線を主張しており、銅山峰への往来があったことを示す。銅山開発で煙害と伐採ではげ山になった以前は、木々が繁茂していたが人跡未踏といったものではない。灌木ノサルスベリはヒメシヤラであることを知っていたので直している。]

第六章 集落

別子本舗

舗は山例書五十三条にも出てくる。舗は坑内という意味である。別子では歓喜・歓東坑を本舗という。広瀬幸平の半世物語に別子に二舗ありというのは、歓喜・歓東の前舗と東延本舗とし、歓喜・歓東を前舗と改めたことであろう。

間符を間歩と表記している案内記を見たが、歩賃金の歩合の意味があるからどうも根拠がない。舗口付近は一般に風化帯なので崩落防止に四つ留の枠組で支保する。舗内労働者は自然と信心によって身の安息を願う。舗口から三枠目まで、右に天照皇太神、八幡大菩薩、不動明王、左に春日大明神、山神宮大山積大明神、薬師如来と神仏の護符を付して心を清めて入坑したことがうかがえる。注釈を掲げ、金掘権利由来及び山例定法等五十三ヶ条の古文書に、舗口に天照皇太神宮、八幡大菩薩、住吉大明神、春日大明神、稲荷大明神としていると参考資料を掲示する。

[別子銅山では坑道入口に護符を貼付したので坑口を間符と書く。佐渡金銀山、石見銀山では坑道を間歩と書く。]

金掘権利由来：慶長15年(1610)、大阪の陣の際に徳川家康が真田幸村に追われて敗走した時、日影澤金山にかくまわれて救助された。その恩に報いて金掘師を野武士の格とした格式を認めたという伝説の由来。

[神仏の護符貼付の説明がない。左1天照皇太神、右1春日大明神、左2八幡大菩薩は、室町時代から江戸時代に信仰された三社託宣の神々である皇室、貴族、武士の神の順で、最高神を筆頭。右2山神宮大山積大明神は、鉱山の守護神。左3不動明王、右3薬師如来は、仏教の病氣平癒の明王と如来。神、仏の順は、おおまかに在来の神、伝来の仏の順である。山に係の仏は、身近な不動明王、薬師如来の順。]

[加藤幸信「北炭真谷地炭鉱の友子制度と奇跡」で引用の「坑夫権利由来書」では、舗口に日本の神仏を祈念し、先左の柱は天照皇大神宮、八幡大明神、稲荷大明神。右の柱は春日大社神山神官、不動明王、12本の布木は薬師如来を表す。

別子銅山の護符・山神宮大山積大明神の代わりに稲荷大明神が入っている。]

山方部落

元禄の頃には、歓喜坑・歓東坑が本舗で、勘場があって山役人、山師、家内(奉公人)がいたので山方であった。勘場が目出度町に移り、その跡に舗方が居住したので、山方を採鉱労働者の集落と誤解されるようになったと考える。

初期の別子病院、後の自彊舎跡のすぐ下から分かれて歓喜坑に向かう谷を鍛冶屋谷という。この谷の右岸が鍛冶屋部落という。この対岸が焼鉱場で、明治になって木方へ移り、その跡にできたのが縁起部落である。葬祭に関してはこの三部落が協力し合ったということや戸数200戸くらいあったとの話から、明治の山方部落は、この本舗周辺の部落と考える。山方の地藏堂が現円通寺跡に遷されて、後に保土野の円通寺が足谷山に移動する遠因になった。

木方部落

木方は焼鉱関係者のことである。焼鉱とは鉱石を蒸し焼きにすることである。薪は量にして鉱石の倍、重量にして半分が必要であった。薪の伐採から運搬までが焼鉱方の仕事であった。焼鉱方には木方(薪方)と焼方があった。木方の割合が多かったので一般には焼鉱方を木方で通用した。製錬作業でありながら溶鉱方(前吹)と区別して焼鉱方(焼前)の職種があった。

縁起の端には元禄4年(1691)に勧請した大山積神社が建っていた。縁起の端の東北を寛政谷という。縁起の端の尾根の南西一帯を木方という。木方は下から溶鉱炉、木方部落、焼鉱場となっていた。戸数は100戸。

[元禄7年(1694)の大火災の少し後に、縁起の端に山神社(大山積神社)が設けられた。]

風呂屋谷部落

鍛冶屋谷の分岐から上流で蘭塔場の裾付近を風呂屋谷といい、更に上流を西山谷と呼ぶ。この谷の両岸が風呂屋谷部落である。古くは観音堂があり、明治に入って別子病院があり、後には自彊舎があった。ここには山内唯一の岩清水が湧いている。舗方・木方・吹方の監督者クラスが多く、病院関係者もいた。戸数は50～60戸。

[元禄7年(1694)の大火災で亡くなった132人の内、元締・杉本助七ほか手代3人は旧勘場(歓喜・歓東坑から10m下)の沢下に土葬された。当時はここを蘭塔場と呼んでいた。残る128人の遺骸は、それぞれ手分けして葬られた。

火災の少し後に、縁起の端に山神社(大山積神社)が、現在の蘭塔場跡には観音堂が設けられた。

明治11年(1878)、広瀬宰平が4人の碑石を現在の蘭塔場に上げた。そして大正5年(1916)の採鉱本部撤退で、蘭塔場の墓石は瑞応寺の西墓地に移された。

現在は、旧別子の蘭塔場では元禄の大火災で亡くなった殉職者の蘭塔法会が行われ

ている。4人の墓碑を山下に移し、殉職者全員の慰霊の場と変わった。そこには両墓制にみられる「拝み墓」と化した。]

両墓制：日本民族の死者の祀り方として、死体を埋葬する一次墓地と、靈魂の供養をする二次墓地とを別々につくる。死者を葬った墓でその靈を祀らず、別の場所に靈のみを移し迎えて祀る。死者を葬った墓を埋め墓、身墓、山墓、野辺、三味、墓地と呼びけがれ多いものとする。別に清らかな所に靈を迎えて祀る墓を詣り墓、清め墓、精進墓、引き墓、空墓所(からむしよ)、ラントウバと呼ぶ。このように二重に墓をつくることを両墓制という。近畿地方に最も濃厚な分布が見られ、中部、関東で多く、そこから東西に離れる東北、北陸、中国、四国では分布が疎になる。ラントウバは、卵塔場、乱塔場とも書く。

山岳靈場に死者供養や墓の痕跡がある。山麓に墓地がある山は靈場化する。死者の肉体は朽ちても靈は山頂に昇って行って、そこに鎮まる。山麓は埋め墓、山上は詣り墓という図式ができる。京都の鳥辺野と東山の関係もこれである。鳥辺野は埋葬、火葬、風葬のおこなわれたところ、東山の靈山はその靈魂の供養がおこなわれる詣り墓であった。修験道の山では谷が葬場、山上が供養所だったために、立山では地獄谷と浄土山ができた。

近畿地方では、葛城、吉野、熊野、大峰、室生、長谷、模尾、生駒、笠置、比叡、愛宕、鞍馬などの靈山靈場である。しかし、高野山を除いて他の靈山靈場は、菩提所としての信仰を失った。先祖祭祀の場所は高野山に限らず、善光寺、大谷本廟、などが代表である。納骨靈場としては、浅草寺、成田山、四天王寺などが有名である。

永久橋部落

風呂屋谷の右岸、蘭塔場の南が土持谷で頑丈な永久橋が架けられていた。この橋の両岸が永久橋部落である。役場関係者が住み、戸数は10戸程度。

目出度町

開坑後あまり年を経ずして銅山の本部として開かれたのは間違いない。最初から目出度町と呼ばれたかは定かではない。伊予屋、えびす屋、料亭一心楼などが開店していた。えびす屋の前は奉行所であったという。江戸時代の山方が商人の集落になったのはいつ頃か。広瀬宰平の後を追って山師、家内達が小足谷に移ったのは明治6年から8年頃までであろう。明治5年(1872)4月に銭湯が誕生している。その後役場、郵便局、料亭、旅館が軒を並べる。明治25年(1892)に重任局が木方に移り、重任局の跡に大山積神社が遷ってきて、大正5年の撤退まで栄えた。戸数は30戸。

吹方部落(見花・両見谷)

見花、両見の部落を吹方部落と呼んでいたかもしれない。元禄の頃は銅蔵が立ち並んでいた。宝永年間には床屋が建設されている。それまでの床屋は縁起の東側にあった。そこを上床屋と呼んだ。木方の床屋が上床屋を吸収して吹所となった。見花谷、両見谷の部落の住人は吹所関係者であった。葬祭も両部落は合同で行っていた。五月の大祭に

は両部落で作った太鼓台が練り歩いた。見花谷は戸数30戸、両見谷は戸数50戸。

裏門部落（炭方）

めぐらされていた柵に三つの門がある。南の門が裏門で、炭倉が軒を並べていた。製錬で炭を多量に使用するので関係者も多かったが、炭焼きは20～30km離れた遠隔地で作業をしていた。住人は各地から輸送される木炭の受け入れ、吹所への供出に当たっていたので戸数は20戸前後。

東延部落

元禄の頃は大根戸と呼ばれていた。文化4年(1807)の記録に東延間符として初めて東延が出てくる。東延部落は、東谷、西谷、そうめん滝下、そうめん滝上の4集落からなっていた。これまでの同一職種の集落ではなく、東延は採鉱夫、機械夫、選鉱夫等が住んだ近代的な集落を形成した。広瀬幸平がいう別子本舗として諸施設が集約されて最盛期を迎える。明治38年(1905)、第三通洞が完成して漸次衰退する。最盛期の戸数は60～70戸。東山間符、天満間符が早く地中で貫通したため鉱石は天満間符に出されたのが東延の開発が遅れた理由ではないか。

[大根戸の読み方はオオネド、古語ならオホネド。大一根戸。「地名を掘る一鉱山・鉱物からの考察」(小田治著・新人物往来社)の付録の「古今の鉱山用語集」に、「根戸」は舗の最も低い場所とある。元禄年間のタヌキ堀で東延まで掘り進んでいるとは考えられないので、いい鉱脈が東下に延びているとの表現と考えられる。

「元禄12年(1698)11月から歎東間符の水抜きをする東山大水抜き工事に着工した。歎東間符が最も深く土底へ切り下げられており、間符口の海拔の高度を考えると、その根戸はもっとも低く下がっている。」(別子銅山図録、22. 別子立川両御銅山舗内絵図の解説文)

歎東間符の大鉱脈の水抜き坑を東山の谷に開鑿する中で、別子最大の鉱脈を大水抜坑で地表と連結した所、地表に投影した所として、開坑口の地を「大根戸」と命名した。後の東延歎治間符が水抜き坑道に当たる。]

[別子銅山記念館の鉱石見本の中に大根戸鉱＝高品質の鉱石とある。三角の良鉱を示すようになった。]

高橋部落（ヨーコーロ部落）

^{たかばし}高橋と呼ぶのは宝永の頃に遡る。ダイヤモンド水の上流の橋を高橋といっているが、以前の高橋はその少し下手で橋台が残る。高橋とは谷底までに距離がある、つまり高い橋という意である。高橋を有名にしたのは新式溶鉱炉の高橋溶鉱炉の誕生である。正しくは東延谷吹所である。ダイヤモンド水の対岸に送風機を備えた様式製錬所が建設されて、高橋はヨーコーロと呼ばれた。ダイヤモンド水の裏山にあって戸数は30戸。

大阪屋敷から「しはすの端」を辿り高橋への馬道、銅山川筋に開けた街道筋は高橋から炭倉の裏門に通じる。この二筋が木炭輸送路で、水利、地形から高橋部落が江戸時代

には馬方部落だと推理する。様式製錬所の出現で木炭輸送の馬方の仕事は次第になくなっていき、馬方の出た跡に製錬関係者が入居するようになった。

溶鉱炉跡の下方の橋が黒橋である。昔の橋は20～30m上流にあった。

[高橋はタカバシと読む。橋が架かっていたのではなく、橋は端であり、尾根の端の意味。高い尾根の端が谷に落ちる端っこ。川に架かる橋名では清音のハシと読む。

端出場の端も、尾根の端っこの意味で、尾根の端が出っぱった場所である。V字谷を形成している足谷川の中で、石ヶ山丈の南から下りて打除社宅跡をとおり打除に続く尾根は顕著な尾根である。]

[シハスの端：ダイヤモンド水の南側の尾根がシハスの尾根で、シハスの尾根の端が、シハスの端である。シハスの尾根には大阪屋敷に向かう馬路があり、馬にちなんだ地名か。シハスは、シハ・ハスが縮まってシハスとなったようである。シハは馬毛と書き、馬の毛。ハスは馬尾毛と書き、馬の尾のけ。シハハスが短縮されシハスとなり、綱繰山の南のピークから足谷川に下る馬の尾のような山容からの地名のようである。]

小足谷部落

明治の初期に開けた最後の集落である。職員は上前に住み、労働者や商人は下前に住んだ。その間の緩衝地帯に小学校の先生や醸造所の役付が住んだ。

明治23年(1890)の別子銅山絵図には、劇場、醸造所は画かれているが、接待館、採鉱課長宅は見当たらない。接待館は明治25年(1892)の重任局の目出度町から木方への遷った頃に、隣にあった住友新屋敷が名前を変えて小足谷に移動した。これらを考えると、ルイ・ラロックが接待館で生活したことは間違っている。

小学校が山林課の隣に移ったのは明治22年(1889)9月であるから、銅山絵図は明治23年以前に画かれたものでないといけない。初期の小学校は小足谷にあって寺子屋のようなものと思われる。上前の戸数は50戸、下前の戸数は30戸。

[轍の跡の所にあった山神さんは、今は取り壊されているが、小足谷部落の氏神として祀っていた。]

第七章 祭礼

別子銅山には、5月の山神祭と正月の大鉞祭の二大祭礼があった。明治5年(1872)4月の別子銅山改革法申渡に、山中の神は山神宮え合社の事、春秋祈祷と唱え他の神社への代参廃止の事とあり、よほど生産に支障をきたしたに違いない。

山神祭

住友家は元禄4年(1691)6月、大三島の大山祇神社から大山積大神を縁起の端に勧請した。舗方は入坑に際して、坑口に祀られた天照皇大神、八幡大菩薩、大山不動明王、春日大明神、大山積大神、薬師如来に安全を祈願した。金掘権利由来には、これらの上に住吉大明神、稲荷大明神が加えられている。合田正良の神の意味合いを紹介。別子銅山

では各所に社祠、寺堂があった。

神社合併の意図の裏には、形式化した神社が民衆と遊離していき、伝統行事も継承されなくなっていった。

山神祭りは5月1、2、3日である。大山積神社の祭礼は5月から9月までの吉日で挙行とのことなので、山桜の咲く時候の古くから1日が休日となさっていたためであろう。松葉さんの記憶では上方歌舞伎は4月30日から5月3日まで、上方力士の相撲は5月1、2日。両日には山方、木方、吹方、東延の太鼓台が出た。子供太鼓台くらいの大きさである。上方歌舞伎は山林課の事務所兼倉庫が建設された明治20年頃以後となる。上方力士の相撲は新座敷跡が土俵となった明治25年以後となる。太鼓台の運行も芝居、相撲と同じころとしなければならない。山神祭礼の起源は明治20年前後となる。それ以前は神事のみで祭礼はなかったのか。統一したのは祭日で祭神ではなかったとしなければならない。1日の神事を2日にし、大劇場、相撲場が造成された。

[山神祭を5月に開催するのは、幕府の開坑許可日が5月9日に由来する。また、古来より祭り月は、農作業のない正五九月となっている。]

[太鼓台も新居浜太鼓台のように華やかな山車でなく、山道の規模からして原型の四つ太鼓のようなものではないだろうか。]

大鉋祭

大鉋祭は山師家内(銅山職員)の新年の儀式である。中核は鉋夫頭である。大正5年に大山積神社が角野の内宮神社に仮遷宮した後、大山積神社に遷宮して大鉋祭は形式的に変化した。そりを引くものから担棒にて担ぐものへ変化した。

大鉋祭の歌の原型は鉋引歌である。新居浜市立図書館の難波江昇から聞いた。鉋はハクでありカネでないので疑義を感じるところがあるので「銅引歌」とすべきでないか。銅は厳重に監視されていたから稼人の自由にはならない。

正月に切鋸、鑿を神棚に飾った時に鉋石も添えた個人行事からか。

江戸末期に横番の善衛門が木炭での火入れ採鉋を考案した。多量に採鉋できたので負夫でなくそりで出したことに由来しないか。大鉋の歌詞は格調高く、労働歌ではないので疑義が残る。大鉋の歌詞の3番を考察し、5番の歌詞の「絵」で情景説明をする。

広瀬幸平が鉋夫の神事である鉋戴の儀と勇壮な鉋引組み合わせて体系化したとは考えられないだろうか。

[カネ引歌ではなく木遣り歌が原型である。囃子の部分も100年の間に変化している。]

[大鉋の歌詞も、富士の山、大鉋の絵で誤解している。富士の山は正月の縁起物、絵は酔(え

い)である。酒を戴いた盃に酔うである。3番と4番の歌詞の前半部が入れ替わっているのに気づいていない。

主に使用した参考資料に「垂裕明鑑」、「泉屋叢考」、「別子開坑二百五十年史話」、「半世物語」、「小説・四阪島」、「旧別子案内」、「明治二十年代・別子銅山復元図」の7つをあげた後に、別子山村郷土誌ほか20をあげているが、100年前の大鉾の歌詞がフリガナが振られて掲載されている「別子山郷土誌」は詳しく読んでいなかった。]

[大鉾を労務政策で考えたのは仮説の立てすぎといわねばならない。江戸時代の18世紀には大鉾は13基あった。]

不動祭礼

大山祇大神の右の座に控えているのが大山不動明王である。金掘権利由来に依れば稲荷大明神と三位一体である。縁起の端の山神社の右下に不動さんの社があったが、稲荷の言い伝えはない。

山内の各部落に祭神があった。山方には若宮さん、目出度町には大木神社、両見谷には天神宮、東延には龍王神社、木方には金毘羅、小足谷には天神か栗島。ヨーコーロの祭神は不明。これらの祭神のその後の遷宮先は不明である。不動は喜三谷に遷された。昭和43年(1968)3月の東平撤退の翌年に、大山積神社の右の座に鎮座した。祭日は7月14、15日であった。

[三位一体とは、キリスト教で、父と子と聖霊は一体であるとの唯一神の教え。大山祇大神、大山不動明王、稲荷大明神の三体の表記は、仏教の三尊仏形式を模倣した神道の三社託宣にみられる三神崇拜というべき形式である。]

[轍の跡の所にあった山の神は小足谷の集落で祀っていた。]

[大山不動は縁起の端から小足谷の疎水上部遷座していた。大正7年(1918)、7月16日に東平の喜三谷に遷座。昭和44年(1969)、大山不動は喜三谷から煙突山登山口に遷座し、11月30日に遷座式が執り行われた。縁起の端の時と同じ位置関係の角野新田町の大山積神社に向かって右に位置する。平成15年5月23日午前1時15頃の火災で焼失した。その後再建されたが、直ちに解体され、最後の祭主となった四国中央市川之江の西川三津男が四国中央市土居町北野1599-4の石鎚神社石鎚本宮境内に遷座させた。

大山不動のレリーフの不動明王の右左に奉祈、台座は少し埋まっているが正面に床屋稼人中□□□、右側面に文久元年辛酉と彫られている。]

お地藏さん祭り

銅山越に無縁仏を供養して地藏仏が3体ある。左の小さいのが延享2年(1744)、右の大

きいのが明治37年(1904)、残りは年代不詳。銅山越は、嶺北の住民は古来船窪と呼んだ凹地である。付近に窪地があって、昔は土俵で豆力士が競った。縁日は旧暦の8月24日、旧盆である。山方の子供が主催した。

第八章 生活と地域社会

雑誌・地域と人間の「別子銅山考」で別子山村と銅山の関係を「共存共栄は見果てぬ元祿の夢であった。」と結んでいるが、別子銅山は地域の協力のもとに継続された。しかし、やがて尽き去る運命にある鉱山相手に、未来永劫に共存共栄を期待するのは無理な話である。村あげて傾倒した別子山村の例は稀有である。命脈に限りある鉱山と共存共栄を考える。

鉱山での飯米、味噌、醤油、魚、野菜、日用品は山下の別子山村、新居浜村から運搬された。明治になって百姓、商人が生活機構に潤いを与えた。片手間に重い荷物を往復30kmの山道を上下したからである。目出度町の商家の繁栄は山内1万人を養えないので、調度課が発展していったのであろう。別子銅山と地域との間には物資交流はもとより、精神的絆が醸成された。これこそが共存共栄である。

鷲尾勘解治翁の地域に対する考えを掘り下げる。脚下照見して稼人の世界から出発した。地域との共存共栄関係は生きるという現実を基盤とした共栄の姿として見たはずである。やがて別子鉱業所の責任者になると、共存共栄の大理想を掲げ、住友の名において地域への報恩の実を尽くさんと実践に踏み切った。

[昭和47年(1972)4月に新居浜市役所に奉職した職員の自主学習グループである地域問題研究会の機関誌である。]

[新居浜の地方後栄策の実践である。現在の鉱業都市・新居浜の都市基盤が形成された。]

5. おわりに

歴史的事象を断片的に知るにはいいが、論旨が一貫していないので、話があちこちに飛び、後から思い出したように書いたり、回りくどい言い回しで記述内容をまとめるのに苦労した。原稿用紙で書いた時代の痕跡でもある。ワープロでの切り貼り、削除の編集と一味違う。辞書引きからの類推と、伝聞を書き込んでいるので、別子の実態に迫り切れていない部分がある。参考資料に「小説・四阪島」を入れているのは「明治の別子」が、フィクションになってしまう。小説を書くに使った元資料に当たるべきである。松葉さんからの聞き取りと思われる伝聞があり、その記憶が正しいか、それが歴史的事実かどうかの裏付けがないので推察となっている。

挿入されている明治中期の別子銅山の復元図は、不朽の資料であり、旧別子を現地踏査するときの必携の資料である。また、鉱夫修行の跡の仕掛の所在などは山中を熟知し

ていなければ示せられない貴重な資料である。40年前の文献、資料が少ない時期に市立図書館に通って書かれた参考図書である。別子銅山のお膝元の図書館ではあるが、地方図書館の限界が出ている。東京大学図書館、国立国会図書館のように情報が集積した図書館を利用できていたらもっと充実したものになっていたと考えられる。